

マザー・テレサ こんにちは

千葉茂樹 著
依光 隆 絵



マザー・テレサこんにちは

千葉茂樹 著 依光 隆 絵



女子パウロ会



Let us love others
As God loves you + me
God bless you
Lu Teresa Me

THE BROTHERS OF THE SACRAMENT

1900



1900



はじめに

こんにちはみなさん。

ぼくは、マザー・テレサの話を始めると、ひと晩でもおしゃべりをつづけるわ
いくせがあります。それほど、マザー・テレサというかたがすばらしく、魅力のある
かただといえると思います。

ちようと、今年の五月でした。この本の原稿を編集部へ手わたしたすぐあとに、ま
たインドへいく仕事ができたのです。そして、マザー・テレサが五月は三日間だけ方
ルカッタにいらっしやると聞いて、ぼくはしめたと思いました。

というのは、この機会に直接マザー・テレサにお会いして、ぜひたしかめたいこと
があったからです。

「マザー、日本の子どもたちのために、助かったころのお話をもうすこしくわしく話
していただけませんか。」

これまでなんどもたずねたことのある修道院の中心で、ぼくはマザー・テレサにお
ねがいしました。すると、どうでしょう。

マザーは、なつかしいわだかめの顔でにこにこ笑いながら、こう答えたのです。
 「わたくしの子どものころのことは、ひとつのことをのぞいて、そんなにたいせつな
 ことはありません。それより、あなたとの限られた時間に、もっと話すべきたいせつ
 なことがあるでしょう。」

子どものころのマザー・テレサにとって、ひとつだけたいせつなことは、十二歳の
 とき、神さまのために生きようと思いついたことでした。

そしていま、限られた時間にふたりが話すべきことというのは、美しい人びとのこ
 とだったのです。

「わたしたちはもともと美しい人びとのことを考え、話しあうべきです。」

これが、マザーのことばでした。ぼくは、あらためてマザー・テレサのすばらしさ
 を見せつけられる思いでした。マザーからこの本を読んでもくださるみなさん、小さなこ
 と、こまかなことに気をとられることなく、マザー・テレサのほんとうの心を読みと
 ってほしいと思います。

一九八〇年 六月

著 者

も く じ

はじめに 5

1 平和をはこぶお母さん 11

雪のおスロで 12

暑いカルカッタで 16

2 インドへの旅 23

小さいアグネスの夢 24

船 出 32

ロレット修道会の日記 37

高校教師テレサ 41

神さまのよびかけ 49



3 貧しい人びとの群れへ 55

わたしの町カルカッタ

パトナの病院で 60

スラムの学校 64

はじめての協力者 81

十二人のシスター 91

死を持つ人の家 96

4 ひろがる愛の輪 107

お初りとチャパティ 108

ハンセン氏病の人びと 114

新しい修道院と若い娘たち 120

修道士とひげの神父さま 126

神さまの働き 135

コレラとのたたかい 143

5 ほえみと勇氣 153

プレゼントはどこからくるか

売りにだされた高級車 162

わたしにください 168

ほんとうの勇氣 173

6 こんにちははマザー・テレサ 177

貴しい人から聞く 178

愛のある家庭 182

よろこびをほこぶ人 187



1 平和をはこぶお母さん



貧しい人は、

とてもすばらしい人びとです。

あの人は、

けっして、いばったり、

人をだましたりしません。

貧しい人ほど、

感謝する心を持ち、

やさしい心をもっています。

マザー・テレサのことば

雪のオスロで

美しい雪景色がひろがっています。

ここ北ヨーロッパの冬にはめずらしく、空が晴れあがっていました。

それは、一九七九年（昭和五十四年）の十二月八日のことです。

ノルウェーの首都のオスロの空港に、ひとりの年とった修道女が、白いナリー（インドの女性の着る衣装）の上に、吉ばけたロートをまとい、そまつな革ぞうりという装いで、おりました。

その人の名まえは、マザー・テレサ。

世界中の人びとからしたしみをこめて、マザー「お母さん」とよばれている修道女で、そのとき六十九歳でした。修道女というのは、あとでわしく書こうと思いますが、キリストの教えにしたがって一生を神さまにささげて生きる女性のことです。

ところで、そのマザー・テレサは七十歳ちかおばあさんにはとても見えないほど元気で、

すたすた歩き、いちばん早く空港の出口から出てきてしまったのです。

なぜなら、荷物はふつうの人とちがってトランクもなく、そまつな手さげぶくろひとっかないので、通関（外国に出入りするとき、持ち物を調べられます）の手続きもしないでいいからです。そして、このすたすたおばあさんは、出むかえの人びとに手を合わせて合掌しながら、ここにこ顔であいさつをかかすのです。

じつは、このマザー・テレサこそ、インドのカルカタからとんできたノーベル平和賞（スウェーデン生まれの科学者でダイナマイトの発明者、アルフレッド・ノーベルを記念して世界でもっとも権威のある賞）物理、化学、生理学および医学、文学、経済、平和にわけて、人類のしあわせにつくした人びとに毎年おくりかえしている「受賞者」なのです。

それなのに、古ぼけたコートに革ぞうりという、ひどく貧しいかっこうはどうしたことでしょう。みなさんは、きっとそう思うにちがいません。

でも、このかざらない貧素な装こそ、マザー・テレサという人にいちばんふさわしいのだといえそうです。

ノーベル平和賞の授賞式は、十二月十日オスロ大学の講堂でひらかれました。



その式場には、ノルウェー国王オラフ五世、ハラルト皇太子夫妻など、この国を代表する千人あまりの人びとが、マザー・テレサの受賞をお祝いするために参列したのです。

定例の十時、ノール平和委員会のチヌス委員長は、壇上からよろこびのこぼれをのべました。

「わたくしの尊敬するマザー・テレサ、あなたは長いあいだ貧しくなやめる人びとに限りない援助の手をさしのべてこられました。わたくしたちは、その労苦に対して今年の平和賞をおくり、あなたをほめたたえることにしました。それは、わたくしたちにとっても、たいへんに光榮なことです。」

あいさつにつづいて、マザー・テレサに、ノ

ール平和賞の金メダルと賞状、それに賞金がわたされました。

背の高いチヌス委員長が、小柄なマザー・テレサのために背をかかめるようにして、そのひとつひとつをさしだします。そのたびごとに参列者たちからは、ほがらかな微笑と大きな拍手がおきおこりました。

うれしそうなおマザー・テレサ、その灰色のひとみには、涙がにじんでいるようです。そして、つぎに受賞者としてのスピーチがはじまりました。

マザー・テレサは、感激のあまりふるえがちな声で、でもはっきりとつぎのようにのべたのです。

「わたくしは、こんなにすばらしい賞をお受けできるような者ではありません。でも、世界中の貧しい人びとに代わってこの賞をいただくことにしました。神さまも、そのことをきつとよろこびだと思えます。」

ふたたび、おられるような拍手がつつぎました。

「世界中の貧しい人びとに代わって」——マザー・テレサのこのことが、さっそくその日のニュース報道によって世界中の国々に新聞、ラジオ、テレビでいっせいに報道されたことは、みなさんも知っているにちがいないと思います。